

温泉遍歴からみえる夏目漱石の真実

湯けむり漱石

ど い な が 高きら
土井中 照

四コマ
マンガ
付き



目次

はじめに

第1章 姥子温泉

トラホーム治療に訪れた温泉

第2章 伊香保温泉

温泉でも癒せなかった漱石の失恋

第3章 道後温泉

田舎への嫌悪を忘れさせてくれる温泉

第4章 二日市温泉・船小屋温泉

新婚旅行で訪ねた福岡の温泉

第5章 小天温泉

『草枕』に描写された俳味溢れる温泉

第6章 戸下温泉・阿蘇内牧温泉

『二百十日』に結実した阿蘇の温泉

第7章 諏訪山温泉

ロンドンに向かう旅の途中の温泉

第8章 カルルスバード、バス

ロンドンでの温泉への見果てぬ夢

第9章 東京の銭湯

『猫』に描かれた東京の銭湯

第10章 嵐山温泉

朝日新聞訪問のついでに立ち寄った京都の温泉

第11章 熊岳城温泉・湯岡子温泉・五龍背温泉

招かれた旅で巡った満韓の温泉

第12章 修善寺温泉

胃病で生死をさまよった温泉

第13章 上諏訪温泉

長野の講演旅行で浸かった温泉と雛子の死

第14章 塩原温泉郷・上林温泉・渋温泉・赤倉温泉

是公とともに大正最初の温泉ざんまい

第15章 宇治温泉

文学芸妓・多佳への想い

第16章 湯河原温泉・伊豆山温泉・宮ノ下温泉

是公とともに東京近郊の温泉巡り

第17章 湯河原温泉

腕の痛みの原因は、リウマチならぬ糖尿病

はじめに





- ① 赤倉温泉 (新潟県) (14章)
- ② 洗温泉 (長野県) (14章)
- ③ 上林温泉 (長野県) (13章)
- ④ 上諏訪温泉 (長野県) (14章)
- ⑤ 伊香保温泉 (群馬県) (2章)
- ⑥ 塩原温泉 (栃木県) (14章)
- ⑦ 東京の銭湯 (東京都) (9章)
- ⑧ 姥子温泉 (神奈川県) (1章)
- ⑨ 宮ノ下温泉 (神奈川県) (16章)
- ⑩ 湯河原温泉 (静岡県) (16・17章)
- ⑪ 伊豆山温泉 (静岡県) (16章)
- ⑫ 修善寺温泉 (静岡県) (12章)
- ⑬ 嵐山温泉 (京都府) (10章)
- ⑭ 宇治温泉 (京都府) (15章)
- ⑮ 諏訪山温泉 (兵庫県) (7章)
- ⑯ 道後温泉 (愛媛県) (3章)
- ⑰ 二日市温泉 (福岡県) (4章)
- ⑱ 船小屋温泉 (福岡県) (4章)
- ⑲ 小天温泉 (熊本県) (5章)
- ⑳ 阿蘇の温泉 (熊本県) (6章)
- ㉑ 満州の温泉 (中国) (11章)
- ㉒ カルルスバード (チェコ) (8章)
- ㉓ パース (イギリス) (8章)



この本に登場する温泉

「たまに朝湯へ来ると綺麗で好い心持ですね」といった。

「ええ。あなたのは洗うんでなくて、本当に湯に這入るんだからことにそうだろう。実用のための入湯でなくて、快感を貪ほるための入浴なんだから」(彼岸過迄 風呂の後2)

漱石の入浴好きは江戸っ子のため？

大正5(1916)年12月9日、漱石が天国に旅立つと、新聞各社は漱石の死を悼むとともに、さまざまなエピソードや逸話の類を書いて、漱石の知られざる一面を紹介することに余念がありませんでした。

10日の国民新聞は、次のようなエピソードを書いています。

▼氏の入浴好きは有名なものであったが、小説を一回書くと「先ず一風呂」と湯に出かける。そこで同じ湯好きの新潮の中村武羅夫君と知り合いになって二人は大喜びで交際していた。ある時、中村君が「お湯の中で小便するほど好い気持ちのものはない」といった。漱石先生「じゃ僕は君の小便で顔を洗っていたのか」といいつつ、交を排して書斎へ引っ込んで

しまった。「それは子供の時の思い出だ」といったが、つむじは曲がってしまって、それから絶交の体^{てい}。

「氏の入浴好きは有名なものであった」とあるように、漱石の入浴好きは広く知られていたようです。

この時代、多くの文学者は温泉愛好者でした。明治時代になると、交通網の発達により温泉地に手軽に出かけることが可能になり、デスクワークの気分転換と静養を兼ねて温泉地へ出かける機会が増えたのです。彼らは馴染みの温泉宿を持ち、その地の温泉を愛しました。塩原温泉の「清琴楼」に長期逗留した尾崎紅葉や、湯河原温泉の「伊藤屋」を利用した島崎藤村夫婦などが、その代表です。数多くの温泉を巡って、その数を誇った人もいますが、彼らのほとんどは歌人や俳人で、その土地の有力者に招かれて温泉旅を愉しんでいます。中には、趣味の温泉巡りを活かして『温泉めぐり』を書いた田山花袋や、『伊香保みやげ』の序文で「温泉文学」を提唱した幸田露伴などの強者^{つわもの}もいます。

漱石も彼らと同じく大の温泉好き、入浴好きでした。牛込あたりの名主の家に生まれた金箔つきの江戸っ子・漱石が、温泉嫌いなわけがありません。

江戸時代、江戸は火山灰土壌のため、町や街道では砂ぼこりがひどく舞いました。夏の湿気と相まって、砂が体にへばりつきます。そのために、風呂に入らないと体がベタベタとして気持ち悪いので、江戸に住む人々は自然と風呂好きになりました。仕事前と仕事終わりに風呂に行くのは当り前の江戸っ子で、体が汗と埃でベトベトになる夏の盛りには、4・5回も入浴する猛者^{もさ}もいたといえます。

そして、湯屋は、江戸っ子たちの社交場となりました。

漱石の次男・伸六の『父・漱石とその周辺』には「私は、小さい時分、父が、よく、日向水^{ひなたみず}の様に生ぬるい湯に、長いことアゴまでつかっていたのを思い出す」「火傷するよう^{よう}に熱い湯に入らなければ、それこそ風呂に入る資格が無いと、無理に意気がる年寄連も多勢いたので、もともとぬる湯好きの父とすれば、むしろ、これは苦手だったと思うのだけれど、それでも隔日に銭湯通いをしていたところを見ると、たしかに湯好きだったのには違いない」と、漱石の風呂好きを綴っています。

漱石の温泉遍歴

風呂好きならば、温泉に目が向くのが当然です。

漱石は、23歳の時に眼病治療で姥子温泉うらぼこに湯治に行ったのを皮切りに、46歳の湯河原逗留まで、数多くの温泉に出かけました。九州、四国、近畿、関東、中部などの温泉はいうに及ばず、満韓の湯にまで浸かり、さまざまな温泉を体験しています。

運命のいたずらなのか、温泉に出かける頃になると、漱石にはさまざまな事件が降りかかってきました。初恋の破綻、都落ち、新婚旅行、初めての小説、朝日新聞への入社、生死をさまよう大患、芸妓への恋慕などの多彩な出来事が、温泉体験とともに漱石の人生に訪れてきたのです。

漱石の温泉行脚の初期の頃は、病気の治癒を願う湯治とうじでした。温泉の治癒力を願って、遠地まで足を運場なければなりませんでした。

こうした漱石の温泉傾向にコペルニクスの転回を果たしたのが、道後温泉です。

道後温泉は、松山の郊外にあり、市街地から30分ほど歩けば、温泉を楽しむことができます。遙か遠くに赴かなければ温泉の効力を得られないと考えていた江戸っ子漱石にとって、これは思わぬ喜びであったに違いありません。

道後温泉を離れて熊本に移ってから、漱石は温泉を愛しました。阿蘇火山帯の走る九州では、さまざまな温泉を楽しんでいます。しかし、江戸っ子漱石は田舎での暮らしに満足できなくなりました。

温泉を楽しめないロンドン留学をきっかけに、漱石の精神衰弱がひどくなります。

東京に帰った漱石は、気の乗らない教師生活を続けながら、ストレス発散のために小説『吾輩は猫である』を書きます。それが「ホトトギス」に発表されて評判となるや、小説をいくつも書き上げました。そして、教師と作家という二足のわらじを脱ぎ捨て、朝日新聞に入社して、作家一筋の生活を歩みます。しかし、体に染み付いた温泉愛好の道を捨て去ることはできませんでした。取材や講演旅行、体の不調解消などの理由で、漱石は各地の温泉に足を運んでいます。

漱石の温泉好きをさらに煽ったのが、満鉄総裁となっていた中村是公でした。大学予備

門時代から深い友情関係にあったふたりは、しばしば温泉旅行に出かけています。是公は親友との温泉旅行という口実を利用して、浮気や女遊びへのアリバイ工作を図ったふしもあるのですが……。

是公が放蕩を楽しむための遊湯であるとすれば、漱石は自らに禁欲の貞操帯をはめ、是公を始めとする周りの人々の遊興を眺めて楽しむという倒錯的な温泉旅を楽しみました。娼婦を「地獄」と称した漱石には、とてもできない是公の振る舞いを眺めることで、自分の心の奥底に眠っている願望を押しさえ込んだのではないかと思われれます。

漱石が小説に取り上げた温泉や風呂

処女作『吾輩は猫である』では、「口にするをはばかりるほどの奇観**」である人間の裸を眺め、銭湯を楽しむ人間たちを皮肉な猫の視線で観察します。

『草枕』では、白楽天の「長恨歌」の一節「温泉おんせんみずすなごころかにしてせうろうしあめいゆう水滑洗凝脂」を引き合いに出し、湯に入るたびに「温泉という名を聞けば必ずこの句にあらわれたような愉快な気持ちになる。またこの気持ちを出し得ぬ温泉は、温泉として全く価値がないと思ってる」と温泉への限り

ない愛情を示します。「余は湯槽のふちに仰向の頭を支えて、透き徹る湯のなかの軽き身体を、出来るだけ抵抗力なきあたりへ漂よわしてみた。ふわり、ふわりと魂がくらげのように浮いている。世の中もこんな気になれば楽なものだ。分別の錠前しんぽりを開けて、執着の栓張しんぼりをはずす。どうともせよと、湯泉のなかで、湯泉と同化してしまふ。流れるものほど生きるに苦は入らぬ」と極楽気分を歌い上げます。

『それから』の主人公は、湯に浸かりながら自らを省み、『彼岸過迄』では湯の中での会話を通じて、登場人物のそれぞれの性格を深く掘り下げます。

心にコンプレックスを秘めた漱石は、なかなか複雑で、湯けむりの中の人物のように、その全体像がなかなか浮かんできません。十一面観音のようにさまざまな顔を持つ漱石は、心身を癒す温泉の湯けむりの中で、どんな心情を吐露していたのでしょうか。

本書は、漱石と温泉の関係を中心に、その頃に起こった事件やエピソードを、その経緯とともに解説し、漱石の生き方を読者に伝えられるようにしました。悪戦苦闘した結果、大地のミネラルをたっぷり含んだ温泉のように、本書には漱石のエキスがいっぱい含まれ

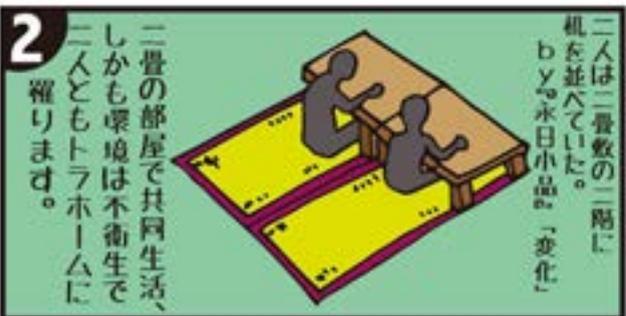
ています。温泉旅のように、気楽に楽しんでいただければ、漱石の魅力がさらに増すこと
でしょう。

なお、本書に引用した漱石をはじめとする作品は、俳句を除く一部を除いて常用漢字や
新仮名遣い、句読点などを加えて読みやすくしています。また、JISX0208の第1・
第2水準以外の漢字が使えませんので、やむなく別の漢字を使っているものもあります。
漱石ファンの方々にはこの点をご了承ください。

また、各章には四コマ漫画と、当時の絵葉書を配した温泉解説も加えています。温泉好
きだった漱石が巡った温泉と、漱石の生き方の魅力を、ぜひ本書でお楽しみください。

令和三年十月吉日 土井中 照

第1章 姥子温泉



姥子温泉は箱根十七湯のひとつです。



▲明治21(1888)年10月、国府津から湯本まで、小田原馬車鉄道が開通しました。



▲姥子温泉は足柄山の麓にあり、金太郎と山姥との伝説から「姥子」という地名が付けられたといわれます。結核で傷つき、目が見えなくなった金太郎(坂田金時)が、この温泉で目を洗ったところ完治したという伝説が知られています。

江戸時代の温泉解説本『七湯の枝折』には「明礬湯にして専ら眼病によし」と書かれ、古くから眼病に効く温泉として知られていました。



▲姥子温泉の絵草書「(箱根名所) 海拔八七〇メートル 清冽の気湯つる」と説明されています。(著者蔵)

姥子温泉案内

所在地 神奈川県足柄下郡箱根町 泉質/単純温泉(明礬を含む)

高瀬道正 著

▲森田富太郎著『箱根温泉案内』(明治27年)に掲載された温泉略の広告です。この本の説明には「高瀬正道の一戸のみにて各舎五棟あり」と記されています。



姥子温泉 神奈川県足柄下郡箱根町 泉質/単純温泉(明礬を含む)

トラホーム治療に訪れた温泉

僕が昔姥子の温泉に行って、一人のじじいと相宿になったことがある。何でも東京の呉服屋の隠居か何かだったがね。(吾輩は猫である11)

子規に眼病のことを伝えた漱石

若い頃の漱石は、眼病に関する手紙を正岡子規に何通か送っています。漱石と子規は第一高等学校の同級生で、互いに落第経験があったこともあり、寄席の話をきっかけに親しくなっていました。

明治23(1890)年7月20日の子規宛ての手紙には「何の因果か女の祟りか、この頃は持病の眼がよろしくない方で読書もできず、とって執筆はなおわるし」と書き、8月9日には「爾後眼病とかくよろしからず。それがため書籍も筆硯もことごとく皆放抛の有様にて長き夏の日を暮しかね、やむをえずくくり枕同道にて華膏(＝昼寝)の国、黒甜(＝眠り)の郷と遊びあるきおり候えども、未だ池塘(＝池の堤)に芳草を生ぜず、腹の上に

松の木もはずえこれと申す珍間も無之、この頃ではこの消閑法にもほとんど怠屈つかまつり候。といつて坐禅観法はなおできず、……仕方なく、ただ『寝てくらす人もありけり夢の世に』などと吟じて独り洒落たつものところ、瘦我慢より出た風雅心と御憫笑可被下候。しかし小生の病はいわゆるずるずるべったりにて善くもならねば悪くもならぬという有様と送りました。

この手紙に子規は反応しました。8月15日に返信した手紙は次のとおりです。

何だと女の祟りで眼がわるくなつたと、笑わしゃあがらあ、この頃の熱さではのぼせがつよくてお気の毒だねえといわざるべからざる厳汗の時節、自称色男はさぞさぞ御困却と存候。しかし眼病くらいですみとなり、まだアゴで蠅を逐わぬところが身上、身上。

僕、君の眼を氣遣うてこれを卜するに悲しや易の面、はなはだよろしからず。六三（易の用語で「巽爲風」、すがめよく視、ちんばよく履む、虎の尾を履む、人をくらう凶なりとあり。すがめは見えぬが当り前、ちんばはふめぬが当り前也。しかるに生意氣にもす

がめ者が物を判じ、盲者が器を評するよりして、とんでもなき間違いの起るとしるべし。

これを今君の身の上にあてて判ずるに、君この頃大工の六三を氣取り、眼疾を粹病と心得、独りよがりのきわみはついに簾三平自慢を三十二相の美人と思ひ、その裾をふんできいよるところ、さきは大不服で齒をむき出しかみつくように怒鳴りちらしたという面也。御用心、御用心。

僕は夜目遠目という諺ことわざの上に一項を加えて夜目遠目病み目となさんとす。定めて御賛成と存候。しかし病み目はやはり目、または低度の近眼にて結膜炎は粹病の範囲内に非ず。（以下略）

占いで煙に巻き、目が悪いせいで相手を美人だと勘違いしているのではないかと、子規は漱石をからかっています。

箱根十六湯のひとつ姥子温泉は眼病を癒してくれる

8月下旬、漱石は子規宛の手紙で、姥子温泉へ湯治に行くことを報告しました。「君の説

論を受けても、浮世はやはり面白くもならず。それゆえ、明日より箱根の靈泉に浴し、またまた昼寝して美人でも可夢候ゆめむく」と書き、漢詩をしたためました。

漱石は、明治23年8月20日頃より9月上旬までの20日間を姥子温泉で過ごしたようです。箱根十六湯のひとつ姥子温泉には、金太郎（坂田金時）が子供の頃に枯れ枝で目を傷つけて失明しかけたときに、箱根権現のお告げに従ってこの温泉で目を洗うと、みごと完治したという伝説が遺っています。

泉質は単純温泉ですが、その中にナトリウムやマグネシウム、カルシウムなどのイオンのほかに、塩素、硫酸、硝酸、メタケイ酸、メタホウ酸などといった殺菌性の強い成分を含んでいます。メタケイ酸は美人の湯と呼ばれる温泉に含まれる保湿成分で、メタホウ酸は目に異物が入ると中和化してくれます。

当時の眼病治療は、ミョウバン水などで目を洗って汚れを取り去ることが中心でしたから、メタホウ酸を含む温泉は、それだけでも目の治療に役立ったのでした。

トラホーム罹病の経緯

漱石はトラホームに罹っていました。トラホームは、クラミジア菌の感染による伝染病で、現在なら抗生物質の投与ですぐに治るのですが、当時は罹患率ひんかんの高い眼病として知られていました。

18世紀末から19世紀初頭にかけて行われたナポレオンのエジプト遠征の際にヨーロッパから世界に伝播し、ペリーの黒船来航によって日本全国に蔓延したのです。「トラコーマ」とも「ぼろ目」も呼ばれ、ひどくなると最後には失明に至ります。トラホームは、明治に入って義務教育が始まるとさらに流行し、多くの子供たちが不潔な環境の学校で感染して、伝染を拡大させたのでした。

漱石がトラホームに罹ったのは、中村是公よしひとと「江東義塾」で講師のアルバイトをしていた19〜20歳の頃です。『私の経過した学生時代』には「この土地は非常に湿気が多いため、つい急性のトラホームを患った。それがため、今も私の眼は丈夫ではない。親はそのトラホームを非常に心配して、『とにかく、そんな所なら無理に勤めている必要もなかるう』という

ので、塾の方は退き、予備門へは家から通うことにしたが、間もなくその江東義塾は解散になってしまったのである」と書かれています。

漱石と是公は、予備門の同級生で、太田達人、佐藤友熊、橋本左五郎ら成立学舎出身者が結成した「十人会」のメンバーでもありました。是公は広島から上京して明治英学校、予備門と進み、成立学舎との縁はなかったのですが、神田猿樂町にあった下宿「末富屋」で彼らと同居しており、メンバーに加わっています。

漱石は、予備門から第一高等学校と改称された明治19（1888）年7月、是公とともに留年。漱石は腹膜炎、是公はスポーツに熱中しすぎたために進級できなかったのです。そしてふたりは「江東義塾」で講師のアルバイトを始め、学校の寄宿舎の二畳間で暮らしていました。

『永日小品』の「変化」には当時の様子が次のように書かれています。

ふたりは二畳敷の二階に机を並べていた。その畳の色の赤黒く光った様子がありありと、二十余年後の今日までも、眼の底に残っている。部屋は北向で、高さ二尺に足らぬ小窓を

前に、ふたりが肩と肩を喰っつけるほど窮屈な姿勢で下調べをした。部屋の内が薄暗くなると、寒いのを思い切って、窓障子を明け放ったものである。……中村と自分はこの私塾の教師であった。ふたりとも月給を五円ずつ貰って、日に二時間ほど教えていた。自分は英語で地理書や幾何学を教えた。

この生活のために、ふたりはトラホームに罹りました。是公は明治21（1908）年2月に左目が痛むと、そのまま失明し、「独眼竜」のあだ名で呼ばれるようになります。

眼科病院でのロマンスは本当なのか？

この1年後、明治24年7月18日の子規宛の手紙には、「ええと、もう何か書くことはないかしら。ああそうそう、昨日眼医者へいったところが、いつか君に話した可愛らしい女の子を見たね。——銀杏返しに竹なわ（＝丈長＝髪飾り）をかけて——天気予報なしの突然の邂逅だからひやっと驚いて、思わず顔に紅葉を散らしたね。まるで夕日に映ずる嵐山の大火の如し」と、トラホーム治療で通っていた神田駿河台の井上眼科病院で見かけた可愛

らしい女の子のことを綴っています。

妻の鏡子は、『漱石の思い出』で、漱石から聞いたこの少女のことを語っています。この少女が漱石の妄想の産物なのか、それとも真実だったのかは、研究者の間でも意見が分かれるところですよ。

トラホームをやんでいて、毎日のように駿河台の井上眼科にかよっていたそうです。すると始終その待合で落ちあう美しい若い女の方がありました。背のすらっとした細面の美しい女で——そういうふうの女が好きだとはいつも口癖に申しておりました——そのひとが見るからに気立が優しくて、そうしてしんから深切でして、見ず知らずの不案内なお婆さんなんかが入って来ますと、手を引いて診察室へ連れて行ったり、いろんなめんどろを見てあげるといふふうで、そばで見てもほんとに気持ちよかったですと後でも申していたくらいでした。

いずれ大学を出て、当時は珍しい学士のことですから、縁談なんぞもちらほらあったことでしょう。そんなことからあの女ならもらってもいいと、こつこつ思いつめて独りぎめをしていたものと見えます。ところがそのひとの母というのが芸者あがりの性悪しつこの見栄坊で、——どうしてそれわかったのか、そのところは私にはわかりませんが——始終お寺の尼さんなどを回し者に使って一挙一動をさぐらせた上で、娘をやるのはいいが、そんなに欲しいのなら、頭を下げてもらいに來るがいいといふふうにいませます。

そこで夏目も、俺も男だ、そうのしかかって來るのなら、こつこちも意地なくで頭を下げてまでくれとはいわぬとあったとあんばいで、それで一思いに東京がいやになって松山へ行く気になったのだともいわれております。(1松山行)

漱石門下の小宮豊隆は『知られざる漱石』に、漱石の目の印象を記しています。

先生の白眼はいつでも充血していて、白く澄み切っていることがなかった。『猫』の中の猫は、苦沙弥先生の眼を評して、『もつとも平常からあまり晴れ晴れしい眼ではない。誇大な形容を用いると、渾沌こんとんとして黒眼と白眼が剖判しないくらい漠然としている。彼の精神

が朦朧として不得要領的に一貫している如く、彼の眼も曖々然昧々然として長しえに眼窩の奥に漂っている。これは胎毒のためだともいうし、あるいは疱疹の余波だとも解釈されて、小さい時分はだいぶ柳の虫や赤蛙の厄介になったこともあるそうだが、折角、母親の丹精もあるにその甲斐あらばこそ、今日まで生れた当時のままではぼんやりしている』というが、それほどではないまでも、慢性結膜炎だかなんだか、先生の眼が濁っていたことは確かだった。

漱石の目にはトラホームによる痕跡が残りましたが、姥子温泉の記憶もまた『吾輩は猫である』にきちんと遺されています。